

ネパールにおける「肉売りカースト」の生活戦略

身分としてのカーストから職能としてのカーストへ

中川加奈子(関西学院大学社会学研究科)

本発表では、ネパールのカースト制度のもとで、主に家畜の屠殺解体・食肉販売を請け負ってきたカドギ(Khadgi)を対象に、ネパールの民主化・近代化がすすむ中、カドギ社会がどのように変容してきたのか、また、近年の情勢の変化をカドギ自身はどのように解釈し交渉を図ってきたのか、その過程を明らかにすることを目的とする。

2008年5月、ネパールの政体は、ヒンドゥー教を国教とする立憲君主国から、世俗主義の連邦民主共和国に移行した。これまでネパールにおいて、「王政」や「国教としてのヒンドゥー教」は、身分制度としてのカースト制度を維持するための一つの支柱となっていた。現在、国からの支柱を失ったネパールのカースト制度は大きな転機を迎えており、国家から市民社会への権限委譲が方向性として顕著になる中で、個々の民族・部族の自己統治の能力が問われつつある。また、民主化・近代化の流れの中で、ネパール社会でこれまで共存してきた個々の民族・部族集団間の、それぞれの社会・経済・文化的位置づけや関係性が大きく変化しつつある。

カドギは、首都カトマンズに古くから居住する民族集団であるネワールの中のひとつのジャート(カースト)で、身分制度としてのカースト制度に基づいて、主に家畜の屠殺解体・食肉販売を行ってきた。1854年、ネパールに住む民族をヒンドゥーの身分制度の中に組み入れたムルキ・アインは、カドギを「可蝕であるが不浄」なカーストと位置づけた。こうしたカースト制度の残骸により、カドギは不当に財を搾取され、就労・就学を拒まれるなど、差別に苦しめられてきた。事態を打開しようと、1973年、カドギは自助組織として「ネパールカドギゼワサミティ(NKSS)」を設立し、カースト内の結束を強めてきた。

1980年代のネパール観光ブーム、1990年、2006年の大規模な民主化運動をきっかけとして、近代的なライフスタイルがカトマンズに浸透した。また、カトマンズ盆地の人口は、出稼ぎ労働者の流入により、毎年約5%の割合で急増した。ライフスタイルの変化や人口増により、これまでは儀礼食としてまつりの時などに数回食べられるのみであった肉の消費量が急増した。肉売りにビジネス・チャンスを見出したカドギは、カースト内の結束を利用し、食肉の仕入れ・解体・加工・販売という一連の流通体系を網羅し、肉の販売に関する経済的基盤の囲い込みを図った。カドギの「屠畜・肉売り」というカースト制度に基づいた身分は、時勢と合い、カドギは食肉業を基盤として経済力を付けることに成功しつつある。

現在、NKSSは、食肉に関わる商売により経済的な力をつけることで自身の政治的・文化的な発言力を強化しようと試みる運動である「ミート・アクト」を展開している。「ミート・アクト」の一環として、NKSSは、町の周縁の原っぱに設置されていた屠場に、屋根や塀をつけることを奨励し、肉屋において、血が染み付きやすい木製のまな板をプラスチックに変えるよう指示するなど、衛生指導を行った。加えて、NKSSは文化的な啓発活動も始めている。例えば、野蛮な屠殺者を意味する外来語である「カサイ」は差別語であるとし、カサイという名称を名乗らないように呼びかけた。また、不浄カーストから上位カーストは水を受け取れないとする慣習をなくすべく、寺院にNKSSのロゴが入った飲料水タンクを設置した。カドギは上位カーストの人生儀礼にて、奉仕として生贄を供養する儀式を実施していたが、近年、対価として金銭を受け取り、仕事として生贄を供養する習慣が定着しつつある。また、ネクタイと清潔なエプロンをつけた上で肉売りをしているカドギの姿も見られるようになった。

これまで、「ヒンドゥー化」「サンスクリタイゼーション」として、社会的・文化的に低位におかれた人々が、自らの権利を要求・獲得するために、上位にある人々の生活体系・慣習を模倣する現象が指摘されてきた。カドギも、社会的・文化的な権利の向上を図っているが、その際には、上位カーストの模倣をするのではなく、カースト制度により請け負ってきた屠畜・肉売りを特有の商売として確立することで経済的に成功し、社会・文化的な発言力を強めるという戦略をとっている。

政体の転換期にあるネパールにおいて、カーストをめぐる社会的状況は変容しつつあるが、その背景には、カドギによる社会への働きかけにみられるような、経済的成功を軸とした社会との交渉も存在している。カドギたちの試みは、カーストを職能の占有として逆に利用し、再解釈する試みと位置づけることができるだろう。

【民主化、社会運動、ネパール、カースト、食肉業】